新型コロナウイルスと見性院とその周辺

～某ジャーナリスト、某僧侶との往復メールより～

住職）　実体経済として宗門の財政に違和感を覚えます。

O氏）　ひょっとすると崩壊の危機は早まる予感がします。

住職）　大法輪も休刊とのこと

O氏）　コロナ危機後「年末までに我々は新しい世界を生きることになる」『サピエンス全史』著者が分析（クーリエ・ジャポン）　- Yahoo!ニュース
https://news.yahoo.co.jp/articles/7b22d14b7cff6c6249316e7171f4485a7286a170?page=2

住職）　私にとって目から鱗です

コロナ危機、ハラリ氏の視座　「敵は心の中の悪魔」：朝日新聞デジタル
https://search.yahoo.co.jp/amp/s/www.asahi.com/amp/articles/ASN4G76G1N4BUHBI02X.html%3Fusqp%3Dmq331AQRKAGYAdr59e_fhdzhoQGwASA%253D
令和２年４月の日曜説教 映像 | 臨済宗大本山　円覚寺
https://www.engakuji.or.jp/blog/31281/

住職）　時代はこれかと

O氏）　ありがとうございます。

住職）　それぞれのトップの発信力が鍵になるかと思います。
宗門の動きは見えにくいですがお寺は相当　疲弊しているようです。

O氏）　確かにその通りです。見性院様の状況はいかがですか？

住職）　これまでは毎週末　法事は４、５件は平均ありましたが今は３、４件づつと言ったところです。ただし見性院信徒予備軍の方たちからこんなご時世なので早めに予約をしたいという連絡が増えているとのことです。それと火葬式をして送骨もそれなりにあるようです。結局は檀家制をやめているために一般ユーザーを取り込めているのが利点かもしれません。毎月必ず一般墓　樹木葬　納骨堂等すべて少しづつですが確実に売れてます。ただし派遣僧侶の件数はここに来て落ちてます。一説にはお坊さんを呼ばない葬儀は増えてきているようです。
ただ私としてはこれからは本当のお坊さんらしいお坊さんだけにしていこうかと思案中なのでいい傾向かと思います。いるお坊さんいる信徒だけでいいのかなというのが最近の私の考え方です。
これからの時代は相当厳しいです。宗門大学　僧堂を出たくらいではとても世の中を渡っていける時代ではありません。ましてや実力のある教授　師家（しけ）などほぼほぼいません。

宗門は今や上は管長から下は末派寺院僧侶まで凡人だらけです。
また愚弟の中にはいくら叱責し、恫喝しても改めないものが少なからずいました。同期の僧侶や近隣寺院もなかなか品行方正のものなどほとんどいません。信徒もふんぞり返っているものが多いのも呆れるばかりです。まさに世は末法です。今のお寺に仏教はありません。ぶら下がりたい人達ばかりでした。今、私は新しい僧侶、新しい信徒の人達との出逢いを心待ちにしています。コロナ禍によってこの世界が一掃され一新されることを祈るばかりです。

O氏）　なるほど、厳しい時代ですね。確かにそうかもしれません...

住職）　自力でやっていけるところに吸収されていくのが自然かと思います。宗派は合併を勧めますが効率的には単立化して廃寺にして(檀)信徒だけを受け入れるのが得策です。これを宗門は恐れているようです。

O氏）　なるほど

住職）　鬼生田総長は 20 年　手塩にかけて可愛がってきた東京グランドを手放したくないようですが私は個人的には総持寺移転もありかと思います。三松閣も宝の持ち腐れです。200 億は無理かと思います。

O氏）　...かもしれません

住職）　因みに臨済宗妙心寺派の宗務庁は花園中高学園に一部移転ですよね。現実的で宜しいかと思料します。

O氏）　確かに

住職）　また世間を騒がせます。なかなか止まりません。
機関車🚂のように！ポッポって

K氏）　ttps://oteranomirai.or.jp/reports/intangible-assets_analysis
おはようございます。これからますます厳しい時世ですね🦋🦋
コロナの時世で見性院様はますます興隆のようですね(^^)

住職）　これまで叩かられるだけ叩かられましたから(笑)

住職）　非常に申し上げにくいことではありますが未来の〇〇塾にしろお寺の〇〇にしろ決定づけられるような提言は何もしてません。ヘブライ大学のハラリ氏とは雲泥の差です。人々はお寺に何を求めているのでしょうか？今釈迦が開祖道元が瑩山がお出ましになられたら何を言うか　そこだと私は思いますが
只管打坐か平常心か　喫茶去か　それだけのことではないでしょうか
人生なんてあっという間に終わっていきます。今でしょ。人ではありません。自分です。

O氏は某ジャーナリスト、住職は見性院住職、K氏は某僧侶。
師家（しけ）とは僧堂の指導者。

禅語「喫茶去」「平常心」「只管打坐」の解説

「 喫茶去 」とは？

“きっさこ”と読む。
直訳すれば「喫茶して去れ」となるが、
「まあ、お茶でもお飲みなさい」と解説されます。
いわゆる「禅語」と呼ばれるもののひとつで、中国・唐時代のエピソードが元になった禅語です。
ふたりの僧が趙州禅師に「前にここに来たことがあるのか？」と尋ねられたとき、それぞれ「来たことがない」「来たことがある」と答え、どちらに対しても「喫茶去」と禅師がお茶をすすめたことでした。
院主（寺の管理職）が趙州禅師に、なぜ二人の僧に、「喫茶去」といったのかと尋ねると、趙州禅師は院主にも「喫茶去」と答えた。
何ごとにも分け隔てをしないことが大切であることを理解させようと、趙州は院主を含め三人に同じように「喫茶去」といったと伝えられています。
お茶を飲んで行きなさいという「喫茶去」は、修行ということにおいては、新参であろうが古参であろうが、修行のうえではなんら変わらない。修行に励めということを「喫茶去」といったのでしょう。
禅僧は俗世のことに右往左往することなく淡々と飄飄として生きていることを是とします。ですから誰某と関係なく「まあお茶でもどうぞ」なのでしょう。はからいを捨ててこその人生を生きてなんぼの世界観です。

訓註　禅林句集（改訂版）
　　「まあ、お茶を一杯召し上がれ」
　茶の湯　禅語便利長　（主婦の友社）
　　「喫茶はお茶を飲むの意味、去は意味を強める助字。
　　従って、お茶でも飲もうよの意味」
　禅語字彙　（柏林書店）
　　「茶でも飲んで行け」の機語。
　禅語辞典　（恩文閣出版）
　　「喫茶し去れ」お茶を飲んでから出直してこいの意味。
　禅林名句辞典　（国書刊行会）
　　「むずかしい話は抜きにして、まあお茶でも召し上がれ。
　　お平らに、お楽にという意味」

ちなみに、「ゆっくりお茶でもお飲みください」は「且座喫茶（しゃざきっさ）」と言うべきなのです。

「 平常心 」とは？

“びょうじょうしん”または“へいじょうしん”と読む。
直訳すれば、いつもと変わらない平穏な心。
日日是好日（にちにちこれこうにち）として常に執着をもつことなく無心に生きることを意味するのではないでしょうか。
常に生きることの難しさを感じます。

「 只管打坐 」とは？

“しかんたざ”と読む。
「ただ　ひたすらに坐る」という意味です。
「合理的、相対的な観念を放棄し、ただ端坐して身体とこころと呼吸を調える」こと
一道に生き一道に終わる毎日の暮らしの大切さを説いた言葉ではないでしょうか。

ハラリ氏の記事

コロナ危機後「年末までに我々は新しい世界を生きることになる」『サピエンス全史』著者が分析

4/11(土) 21:00

配信

254

Photo： Jonathan Nicholson / NurPhoto / GettyImages

マクロな視点から人類の歴史を叙述した世界的ベストセラー『サピエンス全史』と『ホモ・デウス』。その著者でイスラエルのヘブライ大学教授ユヴァル・ノア・ハラリが、仏「ル・ポワン」誌のインタビューに答え、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が社会にもたらす変革について分析した。

コロナ危機後の世界とは

1/3

ふだんは多くの人が祈るイスラエル、エルサレム旧市街の嘆きの壁で、ロックダウン中にひとり祈る男性（4 月 6 日）Photo： Guy Prives / Getty Images

――14 世紀半ば、こんにち「最初のグローバル化」と呼ばれる時代に、シルクロードを旅する商人たちが中国からもたらした腺ペストは、最初イタリアとフランスを襲い、続いてイギリスに到達して、全ヨーロッパに広がりました。

ヨーロッパの人口の半分がその過程で死亡していますが、感染症の深刻な流行がもたらした予想外の結果として、社会が激変し、ルネサンスが起こりました。

また、特に西ヨーロッパでは、ペストによる労働力不足が最初の固定給制度や社会権の出現を準備し、封建秩序に終止符を打ちました。

死亡率は別として、この状況は現在と似ていると思いますか？　この大災害を乗り越えた後では、世界はそれまでとはまったく違ったものになるのでしょうか？　もしそうなら、どのようにしてでしょう？

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の危機は我々の時代にとってきわめて重要な出来事となる可能性があります。この出来事がこれほど決定的なのは、すべてをこれから把握しなくてはならないためです。

歴史は加速しています。古い規則が粉々になる一方で、新しい規則はまだ書かれている最中です。

今後1～2ヵ月で各国政府や国際機関は、実際の条件のもとで大規模な社会実験を実施することになるでしょう。そしてそれが、この先数十年の世界のかたちを決めることになるのです。
エルサレムの私の大学で起こっていることを例にとりましょう。私の大学では、大教室での講義の代わりにインターネットを用いた遠隔講義をおこなう可能性について、数年前からかなり激しい議論がありました。

それには膨大な問題点があり、反対意見も多数ありました。そのため、問題は一向に解決しませんでした。

ところが、3 週間前にイスラエル政府が感染症への対応としてすべてのキャンパスを閉鎖すると、大学はすべての講義をオンラインに切り替えるシステムを導入せざるを得なくなりました。

今週すでに、私はこの方法で 3 つの講義をおこない、すべてうまく行きました。危機が去ったあとで、大学がまた元に戻るとは私には思えません。
もうひとつの例は、数年前から一部の専門家が検討していた「ユリバーサル・ベーシック・インカム」（最低所得保証）です。地球上のほとんどすべての政治家は、このような考えは素朴で非現実的だと思い、ほんの少しでも、たとえ限定的にでも実験をすることを拒みました。

しかし、パンデミックが起こったことで、現在のアメリカの超保守的な行政機関さえも、危機の間ずっと、国民ひとりひとりにベーシック・インカムを支給することを決めました。

この実験の結果はどのようなものになるでしょうか？　いまのところ、誰にも何もわかりません。ですが、教訓は引き出されるでしょうし、それが現在の国家の生命を握る社会経済システムを一変させることもありえるでしょう。
さらにもうひとつ、お年寄りや病人のケアにおけるロボットの利用の例があります。これもまた、乗り越えなくてはならない障壁が多く、しかも乗り越えるのは困難で、経験も限られていました。

しかし、看護スタッフが地球規模で緊急に必要となったことで、ロボットがひとつの解決策であるということに人々が気づきました。ロボットは疲れませんし、感染のおそれもないためです。

したがって、かなりの医療機関で、増え続ける業務のためにロボットが活用されるようになりました。現在の危機が終わったら、それらの機械は物置に戻されてしまうのでしょうか？　私はそうは思いません。

いちばん可能性が高いのは、そのうちの少なくとも何台かがそのまま使われ、危機によってある種の職業の機械化が加速することです。
ほかの多くの分野でも同様のことが起こっています。こうした実験のどれが成功し、社会に対して厳密にどのような影響を与えるのかを予想するのは不可能です。

ですが、私が強調したいのは、この公衆衛生上の危機によって、我々は歴史の渦に入ったのだということです。通常の歴史の法則は中断されました。数週間で、ありえないことがあたりまえのことになりました。

それが意味するところは、我々はきわめて慎重になる必要がある一方で、あえて夢を見る必要もあるということです。

民主主義では現在のような時代に、暴君が権力を握り、ディストピアを強要するものですが、そうした時代はまた、長いこと待ち望まれた改革が実現し、不正なシステムが再編される時代でもあります。

いまから年末までに、我々は新しい世界に生きることになるでしょう。その世界がよりよいものになるよう願う必要があります。

コロナ危機後「年末までに我々は新しい世界を生きることになる」『サピエンス全史』著者が分析
4/11(土) 21:00
配信
254

現代社会を特徴付ける緊急性
――14 世紀のペストと現代の情報時代との違いは、もちろん速度です。こんにちとは対照的に、14 世紀には「緊急」という概念は存在しませんでした。

ところで、緊急性は想像もしていなかった世界を作り出します。

「フィナンシャル・タイムズ」紙で、この問題について「『暫定措置』というのは、非常事態が終わってもなおしぶとく残ろうとする」「いまや世界中すべての国が、大がかりな社会実験のモルモットだ」と書いていらっしゃいましたが、誰がこの実験をコントロールしているのでしょう？

こうした社会実験のいくつかは、新しい問題を解決するために現在の社会状況から自然発生的に現れてきたもの

です。

また、中には指導者たちによって注意深く管理されているものもあります。どのような社会実験を、どのような条件でおこなうか、誰かが選んでいるのです。

したがって、これまでになく政治が重要になっています。この危機によって、政治家たちは巨大な権力を託され、平常時であれば何年もの闘いを要することをわずか数日で実現できるようになったからです。
――たとえば、ヨーロッパでは 8 つの携帯電話事業者が顧客の位置情報データを各国政府に提供することを決めましたが、反論はまったくありませんでした。

もうひとつの例は文化です。私の国イスラエルでは、劇場や画廊、美術館、博物館、ダンスカンパニーなど、ほとんどすべての文化機関が破産の危機に直面しています。

政府はホテルやレストラン、航空会社を救済するのとまったく同じように、これらの機関も救済すべきです。まったくありそうなことですが、政府がもし自分の気に入る機関だけを援助するなら、国の文化状況は数ヵ月で一変してしまうでしょう。

もっと一般的に言って、時間と緊急性の問題は、皮肉なパラドクスに従っています。人類の生活環境が改善されればされるほど、緊急事態も頻発するようになるからです。

14 世紀フランスの「あたりまえ」について考えてみましょう。当時は医療システムに頼ることはまったく不可能でしたし、国の補償を受けられる人はいませんでした。暴力が偏在し、権力者の間では信じられないような腐敗が横行しており、人々は飢えに苦しんでいました。

もし当時、ペストではなく新型コロナウイルス感染症が発生したとして、誰が気にかけたでしょう？　誰も気にかけはしません。感染症で人口の 1 パーセントが死亡する？　そんなことは、まったくあたりまえのことなのです。公共のための緊急事態という概念はそのころまだ知られていませんでした。

反対に現代世界はきわめて洗練された機関――病院や学校など――のネットワークによって特徴づけられます。それらは、想像できないほど人々の生活環境を改善しましたが、同時に社会をより脆弱にしました。

こんにちではどんな些細な感染症でも我々は非常に多くのものを失います。緊急性という概念は、こうした洗練と脆弱性に応じて発展しました。

（以下　略）